非婚女性の妊娠の結果と職業の関係の年次変化 [1]
—1995 年度～2015 年度の人口動態職業・産業別統計による—

○仙田幸子（東北学院大学）

日本では、今日でも、子の出生と結婚は強く結びついている。「出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所）の各回を比較すると、近年、結婚の目的として「子どもを持つこと」がより重視されるようになっている。「第 8 回男女の生活と意識に関する調査」（日本家族計画協会）によれば、2016 年時点で調査対象の 2/3 が「結婚せずに子どもを持つこと」に抵抗感を持つ。実際の中絶の理由としても「相手と結婚していない」は理由の第 1 位であり、「経済的な余裕がない」よりも多い。しかし、人口動態統計によれば、近年、非婚女性の人工死産は減少し、婚姻によらない出生子は増加している。人々の意識としては、依然として子の出生は結婚と強く結びついているが、実態としては、法律上、非婚である女性による出生は増加している。

本研究は、非婚女性が妊娠した場合のおもな結果（非婚出生、妊娠先行婚、人工死産＝妊娠満 12 週以降の中絶）が、1990 年代以降どのように変化しているかについて、女性の職業の年次効果に注目して分析する。分析に用いたデータは 1995 年度、2000 年度、2005 年度、2010 年度、2015 年度の人口動態職業・産業別統計の出生票と死産票の個票を接合したものである。

従属変数を「妊娠の結果」（非婚出生、人工死産、妊娠先行婚; 基準は妊娠先行婚）、独立変数を「出産時の女性の職業×年度」（基準は無職×2015）とする多項ロジスティック回帰分析の結果が、図 1、図 2 である。

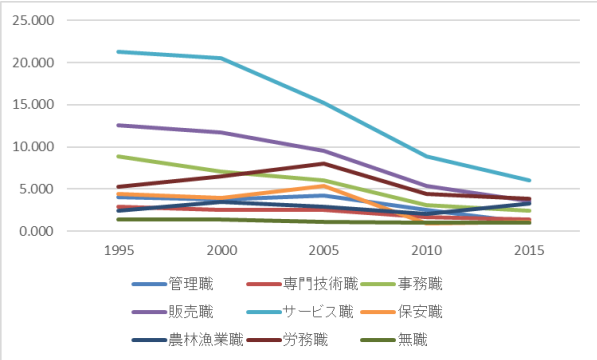

図 1 人工死産リスク ：職業×年度別

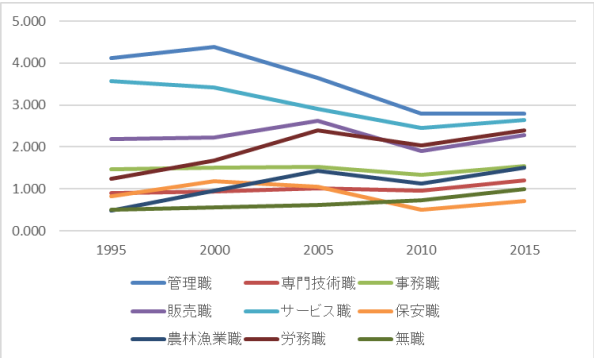

図 2 非婚出生リスク ：職業×年度別

人工死産リスクは 1995 年には職業間の差が大きいが、2015 年には小さくなっている。これは 1995 年にリスクの高いサービス職、販売職、事務職のリスクがほぼ一貫して低下したからである。一方、非婚出生リスクでは 1995 年でも職業間の差の減少は少ない、2010 年から 2015 年にかけて、ほぼすべての職業でリスクの増加傾向がみられる、などの特徴がある。ただし、人工死産リスクほどの職業間の格差は見られないとはいえ、職業間の格差はあり、その傾向は人工死産リスクにみられる傾向とは異なる。非婚出生リスクについては、どの年度でも管理職のリスクが一番高いが、2000 年以降、ほかの職業との格差は縮小している。一方、1995 年には中程度だった販売職と労務職のリスクが 2015 年には高水準になっていることは注目される。

つぎに、このような職業と年度によるリスクの推移がなぜ見られるのかを考察する。たとえば、各職業が典型的にもつ特徴ーたとえば賃金水準や雇用の安定性との関連ーを検討する。このように、統計データから得られる知見を用いて、近年、より多くの非婚女性が婚姻によらない出生を選択するようになった要因に接近する。

（キーワード：非婚出生、人工死産、職業）

[1] 本研究は、JSPS 科研費 JP17K09109（研究代表者 ： 本庄かおり大阪医科薬科大学教授）の助成を受けて実施しました。記して深謝します。